

「マネー」がもたらすステキなこと

北茨城市 長谷川 将大

「パパ、今日はプレゼントがあるよ」

習い事のプールが終わり、迎えに行った私に、息子が何かを隠しながら現れた。『学校で絵でも描いたのかな』と漠然と思いながら帰宅した。

息子はソワソワしていた。夕飯の準備を家族で整えながら、みんなで席についた。いただきます、が言い終わるかどうかという時に、

「パパにプレゼントのカレンダーです。今日は父の日なので、ありがたいの気持ちです。どうぞ！」

カレンダーと聞いて驚いた。中身を見ると、企業からもらうようなものであった。どこでもらったか気になり、話を聞くと、『校長マネーで買ったんだ』と教えてくれた。子どもが話す学校のことでよく話題になっていたことであった。学校内でゴミ拾いや友達に優しくしたといった善行をしたり、校長先生からの謎解きを解いたりといった際に、校長先生からもらえるものが、『校長マネー』だ。校長マネーは、貯まると、先生が飼育しているメダカを貰えるなど、景品と交換できることが特徴の一つだ。その景品の一つがカレンダーだったということだ。聞くと、カレンダーのポイントは結構高い。一つや二つの善行を積み重ねれば貰えるというものではない。このシステムを知った息子は、小さいことに使う気持ちを抑えて、コツコツと貯めて、父の日という機会に、自分ができる感謝の気持ちの示し方として、交換したということだ。

嬉しかった。家庭内で子どもと一緒に絵を描いたり、花を買ったりして、その都度のイベントを盛り上げたことはあった。また、幼稚園で父の日に合わせたプログラムで似顔絵を描いて、それを受け取ったこともあった。しかし、今回は息子が自分で考えて、自分で善行に励み、そして、自分でプレゼントを買い父の日を盛り上げてくれた。息子の気持ちを考えると親として嬉しく、また、子どもの行動力が頼もしく誇りに感じた。よく『初任給で両親に感謝を』なんて聞かすが、そんなことを私は、子どもが七歳の時に経験できた。

このことを機に我が家で始まった取り組みが、『おこづかい制度』だ。元々、家庭内で話はあった。保険会社が主催する、お金の使い方教室のようなものに参加したこともあった。おこづかいの在り方を夫婦で話合ったこともあった。しかし、様々な邪念が頭をよぎり踏み切ることができなかった。『子供にお金の管理はできるのかな』、『勝手に店やインターネットで買い物をして、トラブルに巻き込まれないかな』ところが、自分がプレゼントを貰ったことで考えはガラリと変わってしまった。『自分のため、そして人のために使えるお金は美しい』そのことを家庭でも、子供に実感してほしいと考えられるようになった。

それからお小遣いの在り方を、子供と考えた。我が家では、毎月決まった額を支給する『固定給』の仕組みと、自分のその月の活動を振り返って支給される『ボーナス給』を組み合わせることにした。これは、学習、生活、運動、友達、手伝い、という五観点について、子供自身による自己評価と、両親と話しながら考える他己評価を組み合わせ、支給額が変動するという仕組みだ。実践をしてみると、良さがたくさん見つかった。特に、その月の活動を振り返り、子どもが自分の良さに気付けた。そして、そのことを家族で共有できた、ということが大きい。点数として分かる学習面の得意不得意は視覚化されやすいが、ソーシャルスキルの側面は目に見えないものも多い。月の頑張りを子どもと共に振り返り、見つけたり伝えたりする機会を、おこづかいから得ることができた。子どもにお金を持たせるということに関してマイナス的な感情をもつ人も多いかと思う。しかし、お金を得るために、自分の行いを振り返り、良さをみつめ、そして、得たお金を誰かの笑顔のために使おうとすることを習慣化していくのは、今後の子どものためになると信じた。

家庭の教育といっても、親の価値観に由来してしまうことが多く、選択の幅にも限界があるのではないだろうか。今回は、学校のイベント的側面のある『校長マネー』がきつ

けとなり、新しい家族の側面を見ることができた。子どもが地域や学校から見て、聞いて、感じたことを、しっかりと家庭で受け取り、自分の家でもできることを形にしていくことの大切さを感じる。そして、家庭で実践したことを、学校や社会で子どもが実践していくことで、よいサイクルが生まれるのではないだろうか。また、子どもの活躍に負けないように親としてもアンテナを高くもち、知見を広げていきたい。そんなことに気付かせてくれた、学校での『校長マネー』の存在、そして、子どもの温かい気持ちと行動力に感謝したい。『学校はすごい、子どもはすごい』そんなリスペクトの気持ちを忘れずに、今後も家庭での実践に繋げていきたい。